奴隷志望
井上母娘編

前略
あなたへ
あなたが旅立ってから
今日で5年が経ちました

最初は辛かったけど
周りの人のおかげで
どうにか乗り越えて

今は前と変わらない生活をしています

よし
できた

みつほもどうにか名門校に入れて
多くの学友にも囲まれて

今でも元気なままです

私達は幸せな日々を
過ごしています

あの子も知らない内に
大人になっていました
もう私達だけの
娘じゃないみたい
母さーん
今日もあかねちゃんの家に泊まっていい？
わかった
迷惑かけないように
中を確認してるの
もそうです
罪悪感はあるけど
これも母親の役目
でも…万が一のこともあるし
何かあった時には遅いから
できるだけあの子のことを
気にかけています
みつほのへや
ノックして!!
みつほがいない時
こっそり部屋に入って
そう言い聞かせて
みつほの部屋を調べて
机の上にあった
パソコンを開きました

そこに映っていたのは

あの子そっくりの女の子が

酷い虐待を受け

玩具のように
扱われる様子でした

警察に通報しなきゃとも思ったけど

あ…

ご主人様もっとぉ…

なにもできなかった

サワ…サワ…

それがみつほだと信じたくなかったのか

それとも…

その表情が

は～♥

ふる

ふる

ふる

は～♥

苦しいどころかこれまでにないくらい幸せそうに見えたからか…

そ…そうよ…
まだあの子だって
決まったわけじゃない

サワ
サワ
サワ

動画や写真はまだある
それを全部確認すれば…

ズリ
ズリ
ポタ

日を追うごとに
行為はどんどん過激に
なっていった

ポタ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
イルッ
イルッ

私よりも年上に見える男性と
同級生くらいの女の子に虐められ

見ているこっちに
まで痛みが伝わってくる…

こんな酷い光景なのに…

ブブブ…

なんで…

私は…

興奮しちゃったんだろう…

しゅっ

しゅっ

しゅっ

あ〜♥
あ〜♥
パン
パン
パン
あ〜♥
はー
はー
はー
ガッ
ガッ
ガッ
ガッ
あ〜♥
ー
はー♥
ヌチュ
ヌチュ

おぉ〜〜っ♥♥
イッグ〜〜〜ッ♥♥
いぐ〜〜〜っ
はーっ
あっ
あー

ふる
ふる
ふる
ふる
ふる
ふる
まだみつほだって証拠はないよね…
ゾクゾク
ゾクゾク
ゾクゾク
もっと…もっとよく確かめなきゃ…

茜ちゃんにお泊まり誘われたんだけど行ってもいい？

そう…いってらっしゃい

気づかれないように何も知らないふりをして

あの子がいない間に

パソコンを覗いてまた証拠を集める

みつほのへや
ノックして!!

私の娘にあんなひどい事するなんて許さない…

絶対に証拠を掴まないと…

あぁっ……

ご主人様ッ―

もう……っ―

同期中・

新しいデータをチェックする度に

その子の様子は徐々に獣のように変わっていった

完全に調教されちゃってる…

女の子にこんな酷いことするなんて…

もし私の行動が勘づかれたら

証拠隠滅のためデータが消されてしまうかもしれない

だから…今のうちに全てを目に焼き付けないと…

これはあの子を助けるため…

ちんぽ♥
ジュルー♪
ドバッ
ドバッ
ドピッ
ドピッ
イッグッ
イッグッ
ドピッ
ドピッ

はぁ…
はぁ
はー
ガク
ガク
ガク
ドロォ…
ドロォ

あれから一ヶ月以上が
経過したけど…
結局何も掴めなかった
はー
はぁ
はー
その間に
画面の向こうの女の子は
「メス」として完成した

私は……これからどうすれば…
は…
ウウウ…
一夕同時中

楽しんでくれたかな？

お母さん

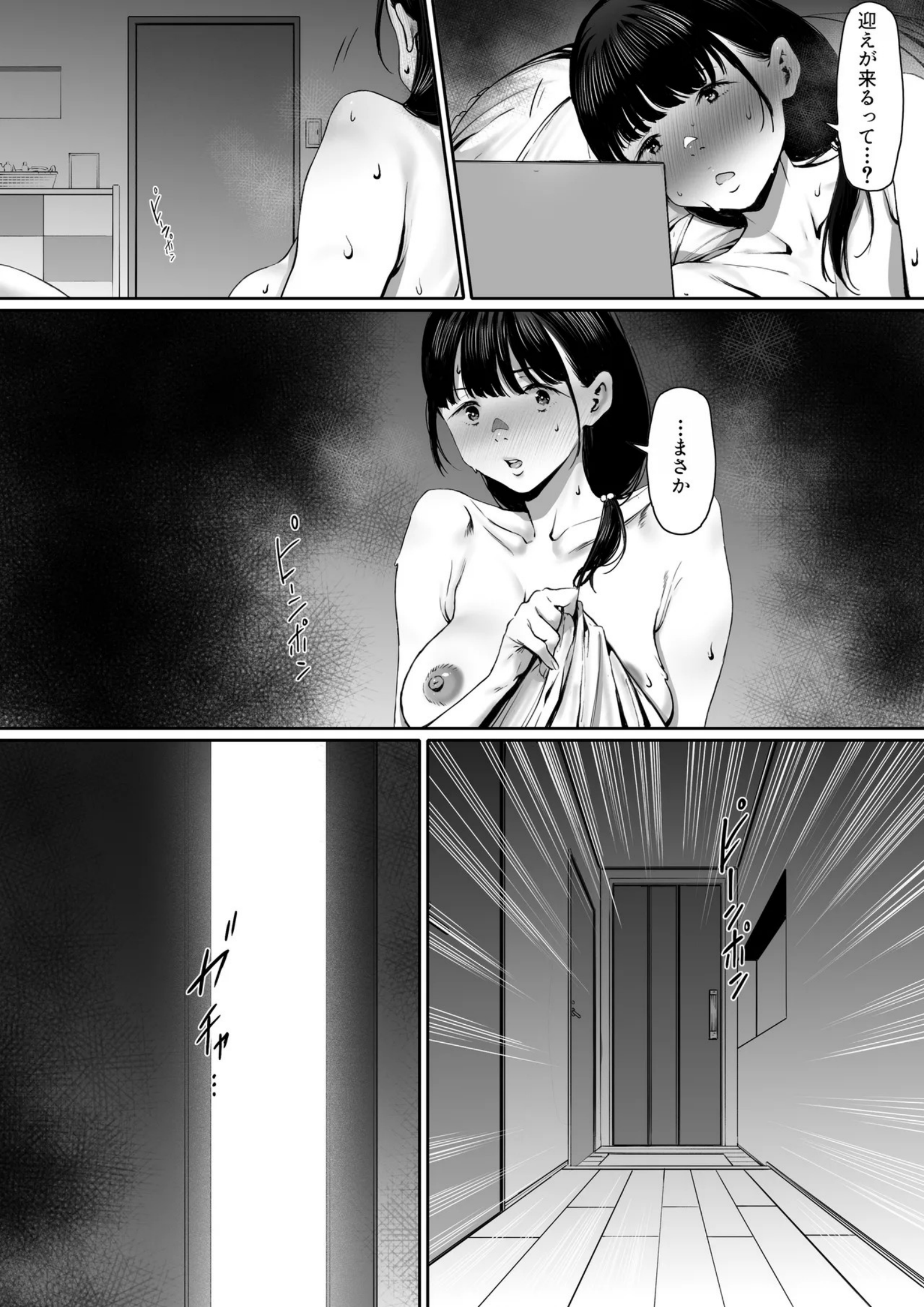
安心して
ご主人様の奴隷になったのは
全部私の意志

これからの人生を全部
ご主人様に捧げること
お母さんには分かって
もらいたかったんだ

でも…これだけじゃ
許してくれないよね
だから…
直接伝えたいんだ

そろそろそっちに
迎えが来ると思う
また後でね

お母さん


ピンポン
迎えが来るって…？
…まさか
ピンポン
ピンポン
ガチャ…

初めまして
井上しほさんですね？

は…はい……

奴隷志望

井上母娘編

気付いた頃には
私は彼女と一緒に車に乗っていた
女性は「娘さんのことは
安心してください」と言う
あの映像を見た以上
安心なんてできるわけないけど
それでも
どこかほっとしている自分がいた
そこから先のことは
よく覚えてない
街を離れてから
だいたい3時間くらい
経った頃
この先
私有地

目の前にあったのは
洋館だった

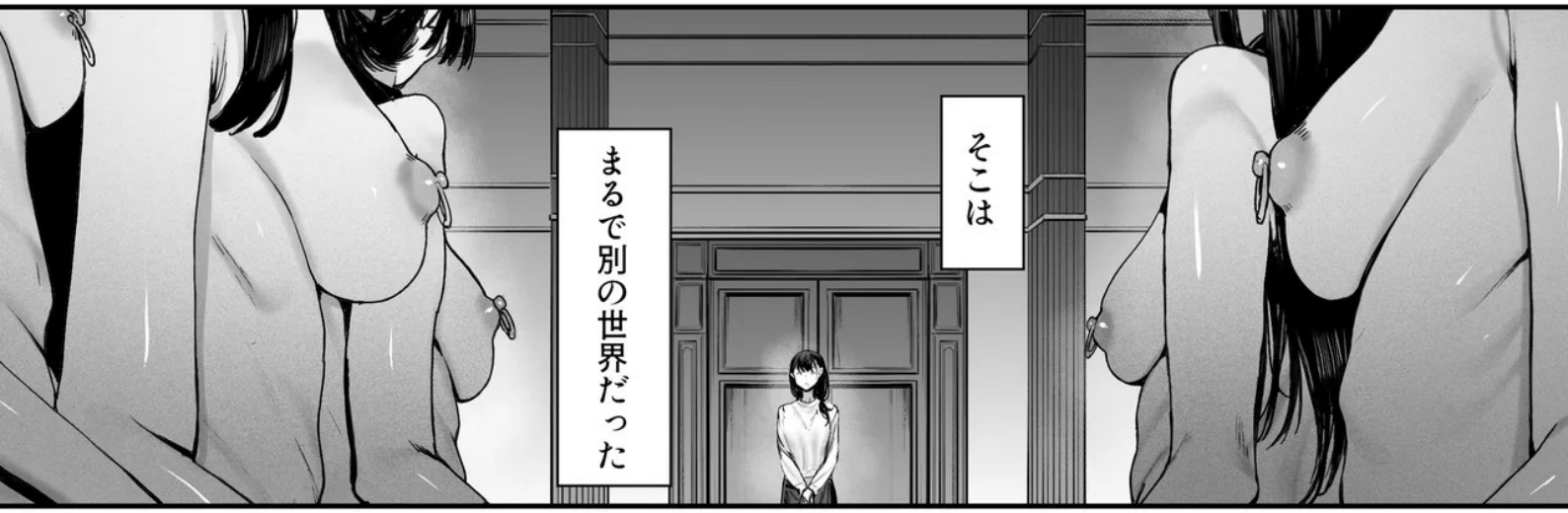
中に入ろうとすると
彼女は静かに一礼をして

庭の向こうに消えていった

深呼吸をしてから
重い扉を開くと

ガ"

009
013
018
016
017


そこは
まるで別の世界だった

首輪をつけた女性が
展示物のように
並んでいる
私に向けられた
その目は
新しい仲間を歓迎
しているようだった
018
016
017

ど…どうしよう……

とりあえず会釈を
返しておこうかな…

そうだ
みつほはどこに…

その時
私の後ろから
足音が聞こえた

きっとここの主人が
帰ってきたんだろう

……？
だれか一緒にいる？

ブルッ

女性たちは自然に
扉の前に整列し
犬のような恰好を
した彼女たちは

私ではなく
主人を待っていたのだ

は~♥

は~♥

彼の後ろにいたのは

はー

005

ペタ

ペタ

ペタ

ペタ

はぁ…

はぁ

裸になって
四つん這いで歩く

さっきの女性と
は～♥
は～♥
005
みつほだった
は～♥
は～♥
待たせてしまいましたね
初めまして
ここの主人です

話は聞いているようですね
申し訳ない…本来なら私が伝えるべきでしたが
005
奴隷が勝手に行動してしまって…いやはや、躾が足りなかったか
ほら…母に言うことがあるだろう
ごめんなさい
長旅でお疲れでしょう
どうぞこちらへお茶を出しましょう
なんだか…もっと…悪い人を想像していたけど…意外と紳士的…
この人の声を聞くと不思議な気持ちになる…
私は奴隷たちに見守られながら紳士とみつほに案内され館の奥へ向かった

紳士は
自分の特殊な欲求を
満たすため

そして…同じ趣味を持つ者達の
オアシスとして

人里離れた山奥に
この洋館を建てたらしい

「奴隷」と言ってもあくまで
一種のロールプレイ

その気になればいつでも帰れる
洋館にいる間は生活費も貰える

彼から渡された
「奴隷契約」の書類にはそう
記されていた

みつほは友達から
勧められて
ここの奴隷になる
ことを決めたらしい

けれど…その子の家庭は特殊で
うちとは事情が違う
私を説得するには自分自身の調教
の記録を見せるしかなかった

それが事の
顛末とのこと

迷惑かけて本当にごめんなさい
そう言ってみつほは私に土下座した
初めて見る娘の土下座はとても優雅に見えた
困惑はしたけどみつほがどんな趣味を持っていようとそれは彼女の自由
そもそも謝るようなことじゃないと彼女に伝える
するとみつほは頭を上げてさっきの女性たちと同じ目を私に向けた
お母さんが心配なのは分かってるでも…ご主人様の奴隷になるのは私の一番の幸せなの
だから…お母さんにもこの生活を体験してもらってそれから決めてもらおうかな…って

……

そ…そうよね…
それがいいわよね

お母さん
よく眠れた？

……ええ

じゃあ…はい
これ―

自分でも分からない

なんで…
この提案を
受け入れたんだろう

次からは自分でつけてね

でも…これでみつほの選択が正しいか否か確かめられる

私の奴隷体験が始まった

裸で家中を歩くなんて
想像もできなかったけど

ここではそれが常識だ
と頭に刷り込んでしまえば

気分はどう？

慣れるのは簡単だった

そこからは
みっほに基本を
教えてもらう日々
だった

歩き方や
挨拶の仕方……

この家での常識を
事細かに教えてくれた

彼女の教え方や
言葉遣いはとても丁寧で

図らずとも
娘の成長を実感してしまった……

それから他の奴隷さん達への紹介も受けた

まだ体験でしかないのに彼女たちは快く私を受け入れてくれた

こうして始まった主人への奉仕活動

とはいえやってることはいつもの家事と大差なかった

相手を快適に過ごしようにするを考えてるみつほからここの主人に変わることだけで

奴隷さんたちとも次第に打ち解けて

あっという間に時間が過ぎていった

そして夜になると
本当のご奉仕が始まる

んぐ

今日の担当は

んぐ〜

みっほだった

んぐ

モニター越しにしか
見れなかった光景が

今は目の前で起きている

んく

んぐ

本当なら
こんな酷いこと今すぐにでも
やめさせなきゃいけないのに

ぺろ

ぺろ

みつほの恍惚とした
表情を見ると

彼女が「女」として
喜んでいることが
嫌でも分かる

はー

はー

それが羨ましくて…

しゅん

しゅん

ただ見てることしか
できなかった

それに気付いたのか
みつほは主人に目配せして

ペろペろ

私も「体験」することを
お願いした

ドキ

ドキ

今日は見学だけのつもりだったのに……

ドクッ

ゴクッ…

ドクッ

まさかこんなことになるなんて……

いざ「それ」を目の前にして戸惑っている私を見て

ドクッ

ドクッ

最初はゆっくり丁寧に……

ペロ

みつほは手を差し伸べてくれた

口の中が…埋め尽くされる…

んぐ…んぐ…

「奴隷は、
ご主人様を喜ばせるための道具」
みつほは耳元でそう囁きながら

んぷぅ

んぷぅ

道具としての動きを
教えてくれた

親子の立場が
逆転したみたいに

んぐぐ

んぐぐ

みつほは私を答えに導いて
私もそれを実践して

彼は口角を上げ
静かに頷く
当事者である私に
対してか

それとも指導者で
あるみつほに対してか
は分からなかったけど

んぷぅ

んぷぅ

主人を喜ばせた

どちらに
しても
私は嬉しかった

少しずつだけど
奉仕の喜びが分かってきた
気がする

ん♡ぷっ

ん♡ぷぷっ

ん♡ぷぷっ

確かみつほはさっき

これくらいのペースで…

娘の顔に泥を塗らないためにも
主人を満足させようと

必死で舌を動かした

素晴らしい
上出来だ

ドクン

この瞬間…
みつほの気持ちが完全に
理解できた

今までの人生で一番の喜びが
そこにはあった

ドキ

ーートキッ

ペロ…

でも
体験はここまで
本当の奴隷にならなければ
主人の全てを受け入れることは
できないとのこと
さっきまでの数分で
私の脳は作り替えられて
しまった
実の娘が
目の前で玩具のように
犯されているのに
「羨ましい」以外の感情が湧いてこない
足りない……もっとほしい……
そのためには…

あー
あー
あー
あー
あー
はー
はー
はー
はー

イックゥー
イックゥ〜

はー
はーッ
はー
はー
はーッ
はー
はーッ
みつほと心の奥底から
分かり合えた気がした

それから
次の朝を迎えて

作法を学び

家事もこなし

夜を待つ

その後は他の奴隷さんと
一緒にご奉仕の練習

まだ本番は見ることしか
できないけど

画面越しに見るよりは
何倍もよかった

足りない分は奴隷さん達が
慰めてくれる時もあった

こうして充実した非日常は
あっという間に過ぎていく

ここに来てからちょうど
2週間が経った日

私はついに一枚の書類に
サインをした

この館は
常識から遥かに逸脱している
でも

ここには確かに幸せが
満ち溢れていた

主人の人格も分かった
彼になら…娘を任せられる

たとえそれが
異常な世界への道でも
母親として娘の背中を
押したいと思えた。

こうして
みつほは正式に彼の奴隷となった

元気でね

ありがとう…お母さん

主人は私の決断に
感謝の意を述べると同時に
娘の奴隷としての幸せを
約束してくれた

明日私はこの場所を立つ

その夜
主人は私に豪華な寝床を
用意してくれた

朝になれば
私は日常に戻る
みつほとの生活も
これで終わり

……旦那が亡くなってから
娘一筋で生きてきた
これから…
私はどうなるんだろう

そう考えると
上手く寝付けなかった

ドッ
ドッ
お母さん、まだ起きてる
みつほは私の部屋に来て
甘く囁くような声で
ペタ
ぐ
お母さん
本当に帰っちゃっていいの？
ここに残って一緒に
ご主人様の奴隷にならない？
ドキ
ドキ
と…提案した

そ…
それはダメ…

ホントに？

嘘ついちゃいけないって
お母さんよく言ってたじゃん

抵抗しようと
思えばできた
はずなのに

娘のか弱い手に
押さえつけられて
しまった

親子だもん
隠したって無駄だよ

お母さんだって…

酷いことされて…人間じゃなくて
道具として扱われて…
…それなのに興奮と喜びを隠せない

雌としての
本能が芽生えてる

どうして…何も
言い返せないんだろう…

もう一度よく考えて？
帰るのと…ここに残るのどっちが本当の幸せか

そんなの……っ

ぞくぞくぞく

この子…なんで私の弱いとこ知って…ッ

はぁ

ペろ

はー

はー

はぁ…

はぁ

くにゅ

くにゅ

あぁ…

…ダメッ…イッ――

…な…なんで止めるのっ？

あーっ

くにゅ

くにゅ

ぺろ

ぺろ

ふる

ふる

ふる

ああ

ほら…ちゃんと本心言ってくれないと

ぺろ

ぺろ

あーッ

あーっ

ズーン

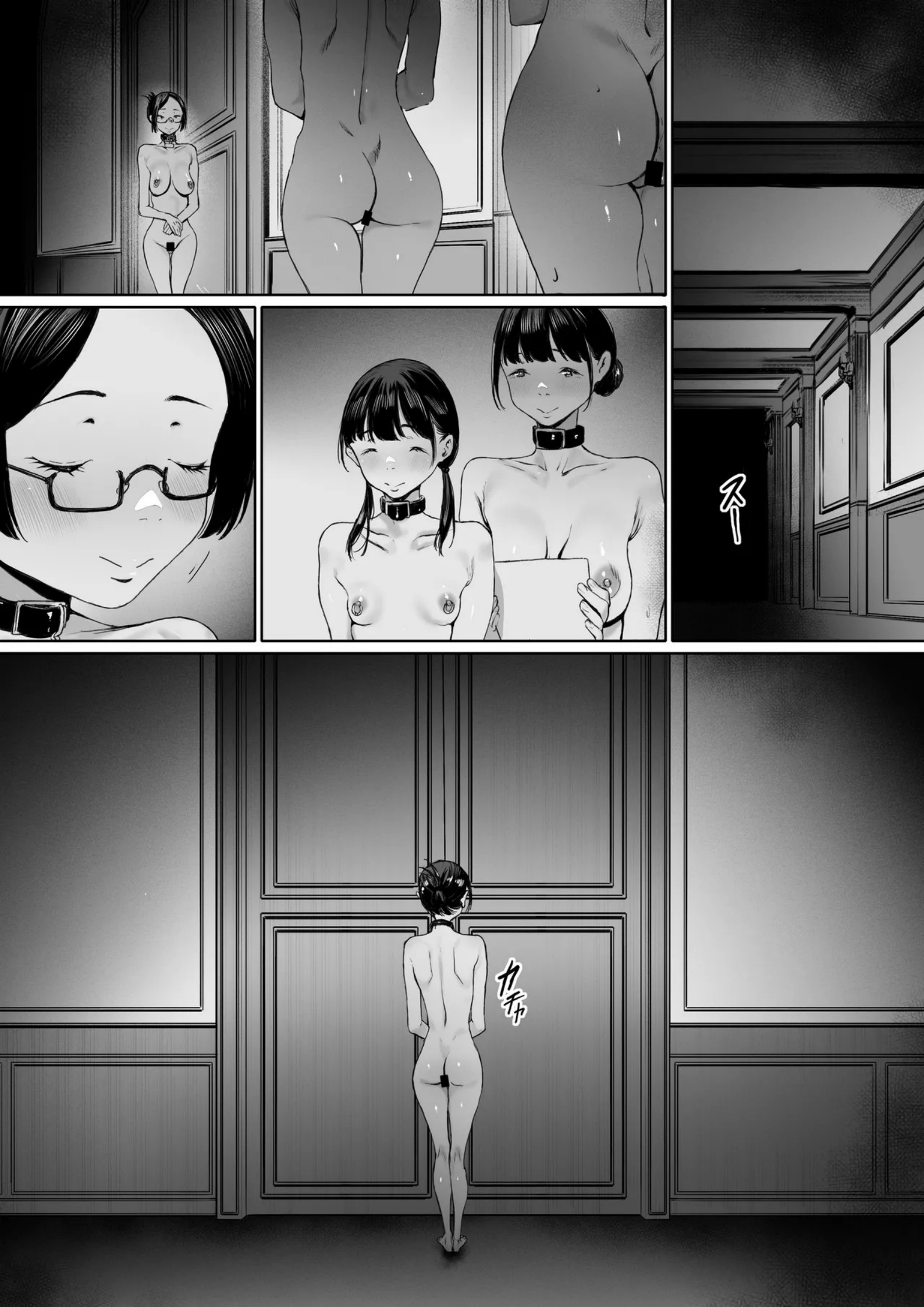
……ッ

このまま生殺しでいいの？

ねぇ……教えてよ
あーの
あぁ
はぁ
はー
そっか…みつほは私にも幸せになってほしくて……
今まで「母親」という型に囚われていたけど
あーの
んぐー
ここに来てからは
ぴゅー
あーッ
「雌」としての幸せを思い出していた
なりたい……
私は…みつほと一緒に奴隷になって幸せになりたい……！

ぐー
クチュー
やっと素直になってくれたね
ぺろ
ぴゅ ぴゅ
イ!!!!!!

んぐー
んぐ♡
ん~♡
ぴゅー
ぴゅー
ぷはぁ~
はー♡
はー♡
あとは
わたしに任せて
あぁみつほ…
こんなに立派になって…
この子はもう
子どもじゃないんだ
私も…もう「母親」を
終わりにしていいんだ…
はー♡


スー
カチャ

カチャ…

ペタ…

ハァ…

ハァ…

さぁ…どうぞ

私、井上しほはこれから人間を止めます
娘と同じ……いいえ それ以下のメス奴隷になります
どうか私をあなたのものにしてください…「ご主人様」
ブル…
ブル…
ブル…
ブル…
ドロォー
ドロォー…

もちろんだ

歓迎するよ

こんないい贈り物をくれるなんて…立派な奴隷だ

ご主人様は私の頭を優しく撫でてくださった

ナデ

私はそれに服従の礼を返す

お母さんを手伝ってあげなさい

ナデ

ありがとうございますご主人様

こうして…娘が見守る中奴隷としての初夜が始まった

ペロ

ふる

ペロ

ふる

みつほと一緒に
ご主人様にご奉仕する

イ…

やっていることは
昨日までと同じなのに

気分は全然違った

ぺろ

私はご主人様を
喜ばせるための道具

そう思うと勝手に
身体が動いていた

ぺろ
ぺろ
ぐぐ
ぐぐ
ぐぐ
ぐぐ

ご主人様が
優しく頭をなでる
「準備完了」の合図だ

ちゅ
ふぅ…

ついに…

ご主人様の全てを受け入れられる…

ふる ふる ふる ふる ふる ふる

はー はぁ

はー

指先が私の肌に触れると

くにゅう

あーっ

否応なしに身体が服従を求めてしまう

ああ

くにゅ

はぁ… はぁ

みっほも私の弱点を責め続ける

はー

ぺろ

むにゅ

私を最高の状態で
ご主人様に献上するために

準備はできました
じゃあお母さん
どうされたいのかちゃんと言って？
娘の前で…こんな恥ずかしい姿を見せてごめんなさい…
ふる
ふる
くぱー
どうか…このどうしようもない奴隷を道具のように犯してください…
トロ…
トロ

ご主人様は
静かに頷くと
私の奥までねじ込んだ
奴隷としての幸福が
脳を満たして
全身を痺れさせる
あぁ……ありがとうございます
ご主人様……

ご主人様とみつほは
何度も
あーッ
あーっ
はーっ
はーっ
この2週間溜まって
いたものを全て満たすため
何度も
んぷぅ
んぷぅ
何度も
あーっ
あぁ
あーっ
私を絶頂させた

あぁ
あーッ
あー
はー♡
はー♡
あー
あぁ
あーッ

獣として雌としての自分を
娘に晒しながら
奴隷として最初の夜は終わった

はーッ
はーッ
はー♡
はー♡
はー
はぁ…
はぁ
れろ…

はあ♡

は♡

ん♡

ん♡

んぐ♡

028
029
これからもよろしく
28
29
ふる♡
ふる♡
ふる♡
ふる♡
028
029
はい、ご主人様
私と娘に
新しい名前が授けられた

その後ご主人様は私達を奴隷さんたちに披露した

これからはみんな仲間だ

「待っていた」と言わんばかりの熱烈な視線を受ける

28は私に目配せを送る

うふふ♥

それを見て私の中の小さな不安も期待に変わり

その笑みの奥に嫉妬や羨望がわずかに見えたけど

それは決して不快を表すものじゃない私は笑みを返した

みんなに見送られるようにご主人様を追って館の奥へ向かった

ペタ

ペタ

ペタ

ペタ

ふる
ふる
ふる
ふる
ふる
ここから
本物の調教が始まる
029
ドロ
ドロ
ドロ
ドロ
うむ…素晴らしい
でも…
私の場合は少し特殊だった

直接鞭を振るうのは
ご主人様ではなく

ドロォ

娘の28だった

プル

プル

プル…

いつでも始められます
ご主人様

うむ
それでは——

ドロォ

ドロォ…

ご主人様が命令を出し

28がそれを実行する

自分も調教されたからか
それとも私の弱点を
知っているからか

029

痛みの度に快感が体の奥から
引きずり出された

ご主人様の声を聞く度に

私の快感は増していく

上から下まで

舐めまわすように見ると

ご主人様は一つ頷いて

28から鞭を受け取った

ふる
ふる
ふる
029
仕上げだ

ぷはっ
よく頑張った
カク
カク
028
28の手で乳首に完成の証が授けられた
ありがとうございます…っ

感覚の調教は終わり

ここからは人間を捨てる調教だ

ペタ

ペタ

お座り

くぅー

基本の作法は熟知しているがそれだけでは足りない

はー♥

はー♥

本物の奴隷は犬のように考えずに命令に従うことができる

ドロォ

ドロォー

は～
は～
うむ
29
服従の儀を
これは今まで娘に教えてきたこととと真逆だ
人間を忘れ獣に戻る
プシャーッ
プシャーッ
この調教はそれを刷り込むためのもの

うむ
完璧だ
二人とも
お座り
ご褒美をあげよう
もちろん28にもだ
私達は
ご主人様からご褒美をもらった
他でもない娘と共に
これを受け取れたことが
何よりも嬉しかった
028
029

本来ならもう第二の証を授かってもいい

ブル…

028

でも
私はご主人様にもっと完成した
私を差し上げたい

はーっ

はーっ

029

プル

プル

はー

28の提案でさらなる
調教を受けることにした

それは
28自らが考案した――

んぐー

んーっ

ぐー

プル

ぐー

プル

ん

ん!!

んんー

ん!

今までの幸福の経験に基づいて作られた

028

私をさらに完成させる調教だった

ご主人様はその発想と
それを実現した功績をたたえ

28に第二の証を授ける
権利を与えた

028

ぐにゅラー

あぁ……なんて立派な娘なんだろう

029

しばらくして
ついに個人調教が終わり

先輩たちが見守る中

ブル

ブル

完成の儀式が始まった

執り行うのは
もちろんご主人様

彼は自らの手で
最後の証を

私に授けて下さった

ズーン

あまりの幸福と達成感が絶頂となって私を満たす

ブシャイイイ

ブシャイイイ

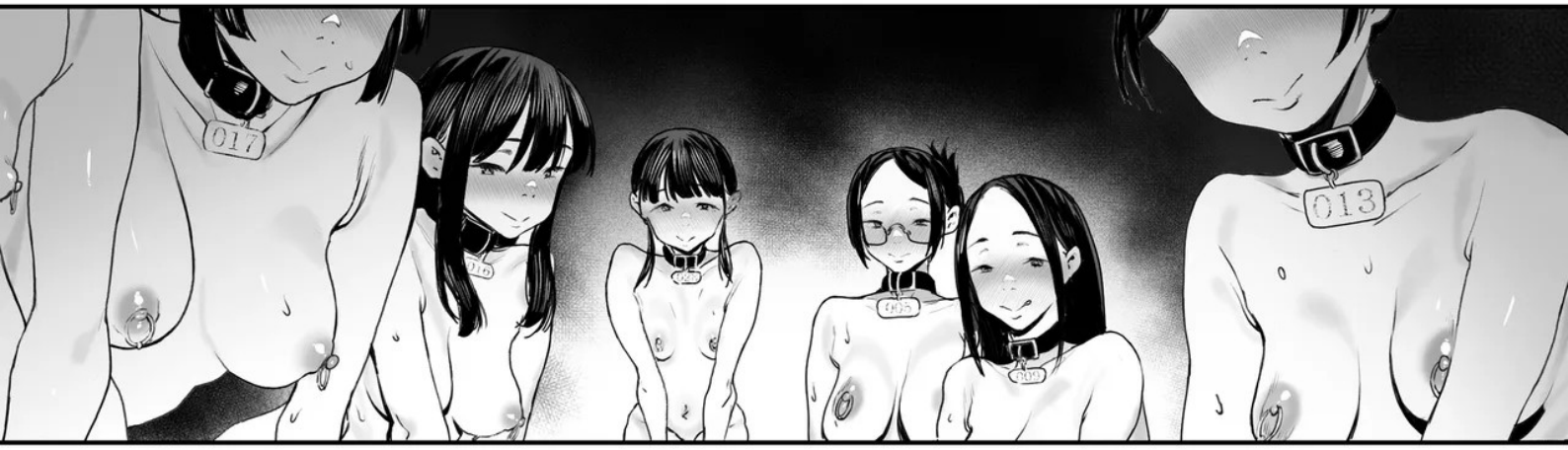
[redacted]

儀式は
終わらない
受けた調教の成果を
ご主人様に披露する
初めてここに来た夜
みんながそうしていた
ように
奴隷として雌としての
生き方をご主人様に示す
あー
あー
はーッ
あー
あー
あー
あぁ
あぁ
あぁ
あぁ
あー
あー
ズン
ズーン
ズーン
ズーン
パン
パン
パンッ
パンッ
ズーンッ
ズーンッ
ズーンッ
ズーンッ
017
009
013
029

016

ドンッ
ドンッ
ドンッ

今ならご主人様の奴隷だと
胸を張って言える



はー
あー
んん…
…ッ
ん
ぐろ
ぐろ
スポ
スポ
んー♡
んぶ♡
ぐろ
ん♡
はー♡
ぐろ
ぐろ
ぐろ
ぐろ
ぐろ
あ
ら♡
ん♡
んぐ
はー♡
はー♡
ん♡
スポ
スポ

パーン
パンッ
パンッ
んぐ
ん♥
ん♥
う♥
は♥
あ♥
は♥
あ♥
あ♥
ん♥
ドロォ
ドロォ
ドロォ
ドロォ
あ♥
あ♥

ぱぁ
ぱぁ
はぁ♡
あぁ♡
はぁ♡
ぱろ
ぱろ
あぁ♡
ドッ
ドッ
ドッ
ドッ
んぁ♡
んぁ♡
んぁ♡
029

最高の夜が明けると

改めて
新しい日常が始まった

おかえりなさい
ご主人様

もう母と娘の関係ではない同じ奴隷同士
ご主人様に仕えるための道具

対等な関係であり

みんな新しい家族だ

んぐ♥

んぐ♥

ぺろ

ぺろ

一緒にご主人様の最高の芸術品となるため

ご主人様を満足させるため

は♥

は♥

は♥

は♥

ペタ

ペタ

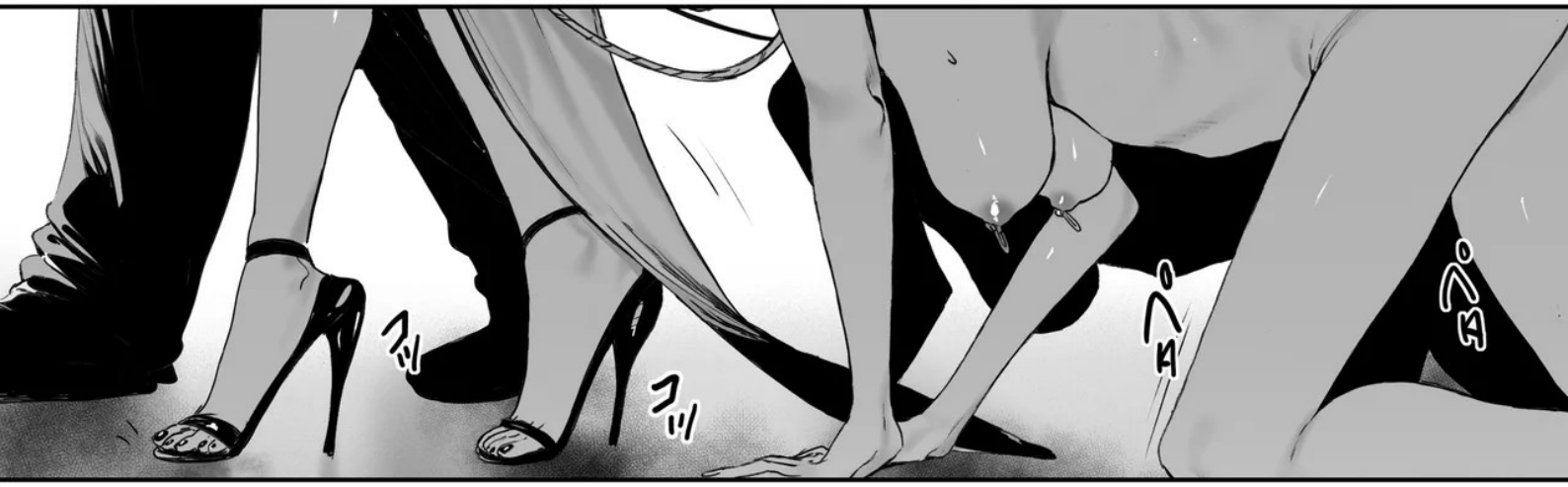
ペタ

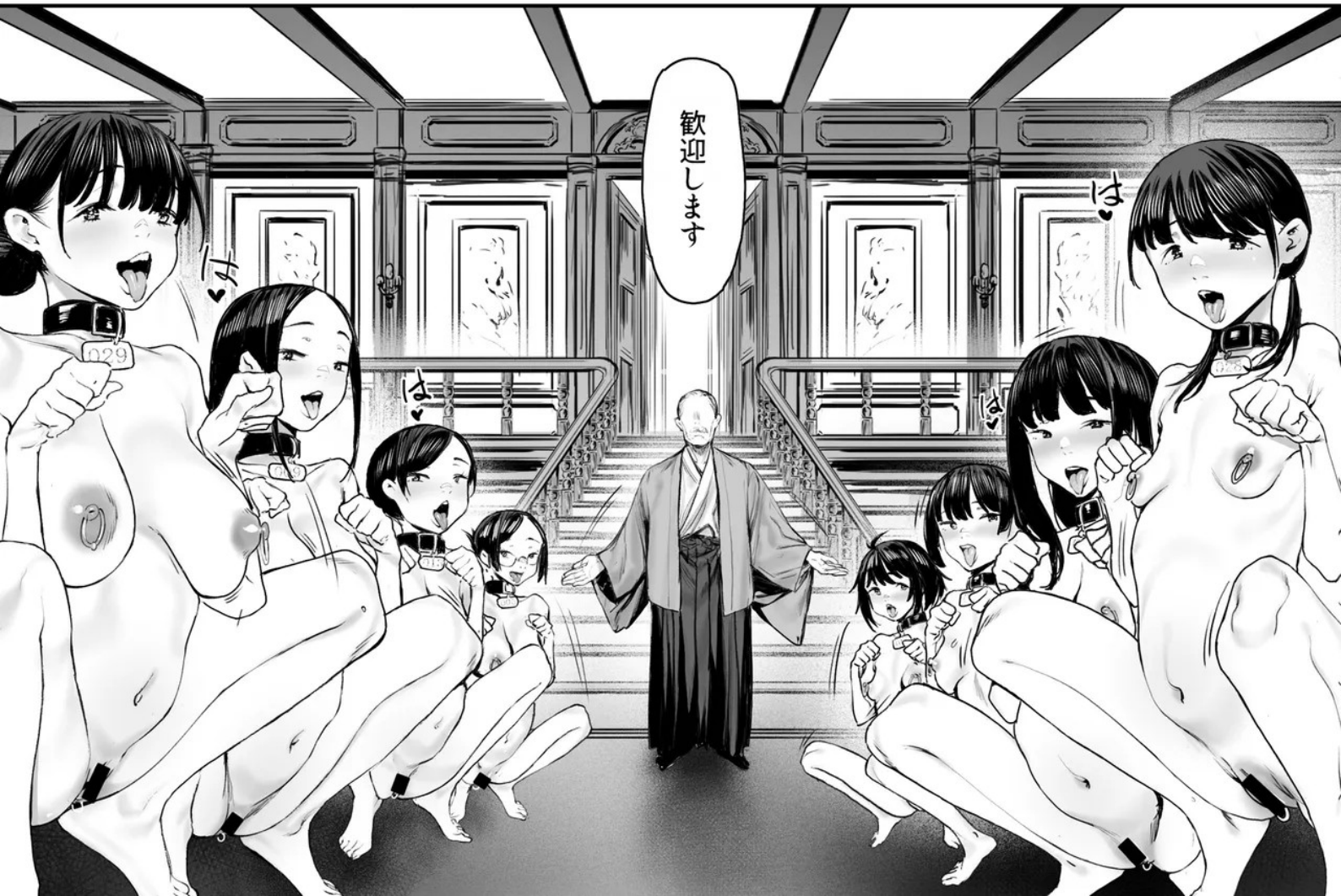
ペタ

調教の日々を繰り返した

ここに来て半年が経ったある日―

「交流会」が開かれた





同じ趣味を持つ調教師たちが
お互いの作品を披露し

その発想や技術を
共有しあう宴

奴隷たちの展覧会だ

いよいよメインディッシュが始まる

ご主人様たちがテーマを決めると

私は娘と一緒に「新作」の代表として

はー

はー

あー

クチュー

クチュー

クチュー

あ

クチュー

クチュー

はっ

はぁ
あぁ
パン
パン
パン
あぁ
これまでの調教の成果を
舞台の上で披露したり
あぁ
あぁ
あぁ
ぐぷ
ぐぷ
ぐぷ
ぐぷ
ぐぷ
んぐ
んぐ
んぐ
パッ
パッ
パッ
パッ

他の奴隷たちと「交流」したり

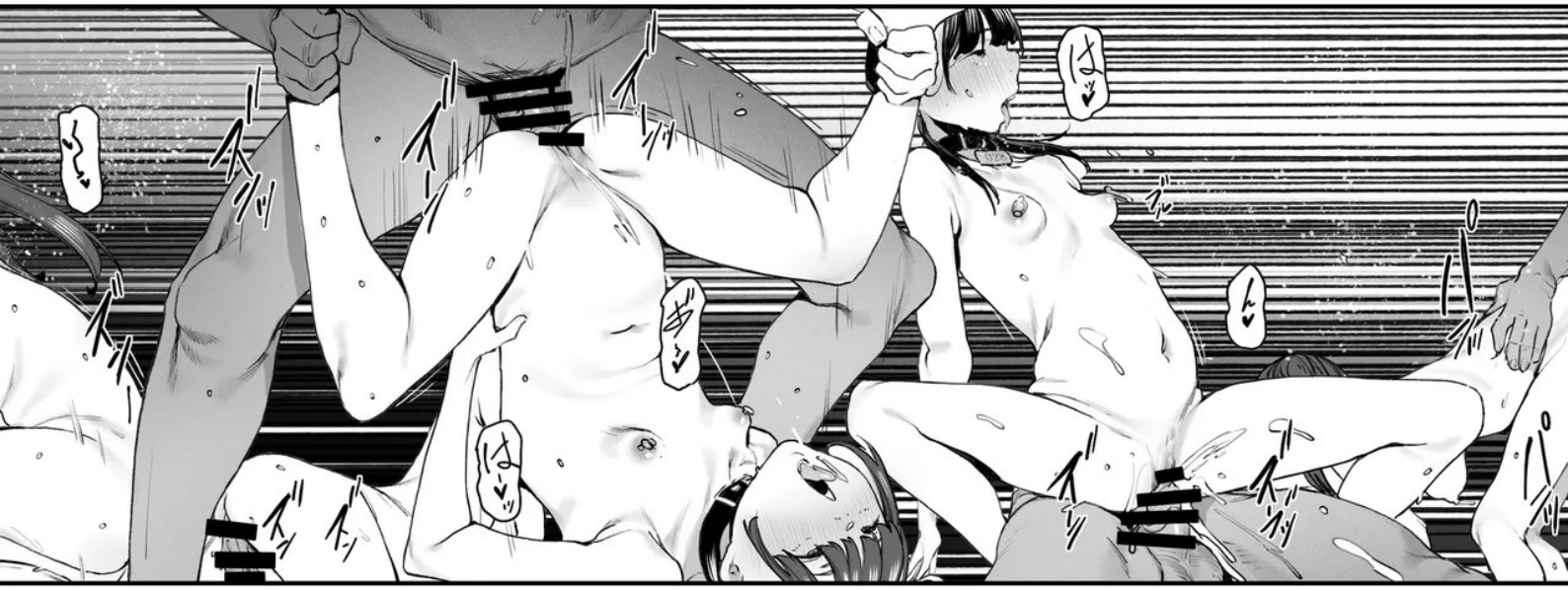
他の組と
競い合ったり

ん♡
ん♡
ん♡
ん♡
はー
ぐぐ
ぐぐ
ぐぐ
ぐぐ
ぐぐ
ぐぐ

あ♡
あん
あ♡
あ♡
ん♡
は♡
ぐぐ
ぐぐ
ぐぐ
ぐぐ
ぐぐ
ぐぐ
ぐぐ

あ♡
あ♡
あ♡
あ♡
はーっ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ

最も下品な姿を晒して自分の
ご主人様の威厳を示したりした



何度絶頂したか分からない
029
028

[redacted]
[redacted]
[redacted]

気付けば
表彰式になっていた…

それでは結果発表です

今回の優勝は

私のークッキーちゃんです

はぁ♥♥♥

はぁ♥

みんな手ごわくて
優勝はできなかった

次は必ず優勝する
と28と共に決意を固め
さらなる調教を受けることに決めた

さぁー奴隷のみなさんー
クッキーちゃんに
ごー褒ー美ーをあげましょう
はぁ♡
あぁ……次は勝ちたいな…

はーー♡
はーー♡
はぁーー
はーー!!
……ッ
ぶーーー♡♡♡
こうして
表彰式も終わり

ここからは
さらに親睦を深める時間
前よりもずっと
美しくなったな
やはりここに
預けて正解だった
はぁ~♡♡♡
相性のいいご主人様がいたら
その人の奴隷になることもできる

優勝こそできなかったけれど
私たち母娘は人気だった
ねぇ
私の奴隷にならない？
いっぱい虐めてあげるからさ

私の作品を気に入って
いただけたようで光栄です
しかし
この子たちは自らの意志でここを選んだ
お譲りすることはできません
ナデ
ナデ
629
629

君たちは私の宝物だ

28

29

前略あなた
私たちは今とても幸せです

これからもご主人様のために
全てを捧げ続けます

どうか天国から
私たち母娘を見守って
いてください